

宮脇晴・綾子夫妻のひとと作品について

——福本まさ子氏へのインタビュー——

成瀬美幸

豊田市美術館では愛知県の油彩画家・宮脇晴（1902-1985）と、その妻で創作アプリケ作家の宮脇綾子（1905-1995）夫妻の作品を所蔵している。宮脇晴は、十代で大沢鉦一郎と交友し「愛美社」結成に参加、18歳で帝展に入選し、その後春陽会会員として名古屋で活動した画家である。加えて高校の美術教諭として多くの後進を育てた教育者でもあった。妻の綾子は40歳を過ぎてから制作活動を始め、古い布を用いた創作アプリケが国内外で評価を受けた。その見立ての斬新さと素朴な美しさに溢れた彼女の作品に、今なお魅了される人は多い。

当館の宮脇夫妻作品のコレクションは、すべて作家並びにご遺族からの寄贈によるものだが、2010年度はこれに宮脇晴作《パッチワークの女性像》の油彩画1点と、かごに入った蟹のスケッチ1点が加わった。宮脇晴に長年師事し、《パッチワークの女性像》のモデルでもある画家・福本まさ子氏からの寄贈である。

筆者が福本氏からモデルになった経緯や生前の宮脇晴と綾子について最初にお話を伺ったのは2010年6月。話題は2点の作品にとどまらず、晴から受けた指導や綾子の制作スタイル、夫妻の人柄、作品の制作背景まで広がっていった。発言の一つ一つからは、今もって思慕の情を寄せる宮脇夫妻について知っていることを伝え残したいという思いが伝わってきたのである。

2011年11月、改めて福本氏に、氏が参加していた「かようぞく」や、晴の作品のこと、いつも二人一緒だったという宮脇夫妻についてうかがった。「かようぞく」は、晴が自宅のアトリエで指導していたアマチュアの絵画グループの名称である。毎週火曜日の夜7時に開いていたこともあり、参加者の多くは仕事を持つ女性で、アマチュアとはいえ絵を描くことに真剣に取りくむ者の集う場であった。福本氏は、名古屋弁の抑揚のあるイントネーションで明瞭に、彼女から見た「晴先生」と「綾子先生」の日常の姿や、仲間たちとのエピソードを生き生きと語られた。

本稿は2010年6月と2011年11月の二回の記録をまとめたものである。福本氏の話は、氏が絵を学び始めた1960年代前半から宮脇晴が亡くなる1985年までの、宮脇夫妻のほぼ老年期にあたる。インタビューは筆者、記録は西崎紀衣がおこなった。ここでは、二回にわたり聴き取った内容を適宜編集して掲載する。

一宮市のお宅までうかがうと申し出ても、福本氏は「いえ、豊田市まで行きます。高速使えばすぐですから」と明快に言い、愛知県を西から東へと車で元気に運転してくる。話のなかにも、昭和という時代を象徴するような活動的な女性たちが登場する。彼女たちに囲まれた宮脇夫妻の姿は、作家自身の残した言葉や文章を通してみた作家像とはまた異なる印象を受けるものであり、在り様そのものが教育者ではなかったかと興味深い。

「かようぞく」の話

—— 福本さんが宮脇晴さんに習い始めた時期を教えてください。晴さんはもう名古屋市立工芸高校の先生を退職されていたか。

福本 私が20、21歳頃だったかなあ。今69歳ですから、47、8年前、1963年頃ですか。

—— 高校退職は1962年ですから。

福本 退職直後くらいですね。あの当時の写真を久しぶりに見たら晴先生が若々しくてびっくりしました。私が通っていたのは「かようぞく」というグループなんです。今から思うと本当に素晴らしいメンバーばかりでした。晴先生のご自宅でやってらっしゃった。

—— 「かようぞく」はいつ頃から始まったんですか。

福本 私が紹介されて行ったときにはもう始まっていたんですよ。おそらく退職されてから本格的にやっておられたんじゃないかなと思うんですけどね。

—— 「かようぞく」というお名前は。

福本 私が行ったときにはもうついていました。毎週火曜日夜に行くもんだから「かようぞく」。もう何十年と通いました。メンバーの佐分妙さんは、画家の佐分眞が伯父にあたる方で医者ですね。中野ふみ子先生は金城学院の体育の先生で、浦川美枝先生は一宮高校の先生で。長谷川澄江さんは会社員でした。

—— 皆さん特に美術の先生というわけではなかったんですか。

福本 ええ、みんな趣味で。春陽会に出したのは生徒のなかでは私ぐらいで。大体、先生は公募展やいろんなところに出品しない、なんて一切言わなかった方なんです。春陽会に勧誘しようなんて気は全然ないですからね。私も出す気なかったし、ただただ絵が好きで。私は若い頃は旅に出るのが好きで、札幌に身内がいたもんですから北海道に半年とか一ヶ月とか出かけていってユースホステルに泊まって絵を描いて歩いていて。あるとき現場で描いてきた絵を持って行って先生に見せたら、「これを大作にして春陽会に出したらどうですか」と言われたのが、「かようぞく」に入ってもう10年近く過ぎたあとなんですよ。初めて絵を見てそう言われて春陽会に出品したのが最初です。他の方は一水会とか光風会とか、それぞれ自分で決めて出していましたね。それも先生はいいとも悪いとも何にもおっしゃらなくて。そんな感じの先生でしたから、本当に純粋に絵画好きな仲間が集まって、先生が動けなくなる直前まで続けました。

—— 「かようぞく」のメンバーはずっとかわらなかったんですか。

福本 いえ、何人か入れ替わりはありました。亡くなってやめた方もいますね。古くからいて最後まで残ってたのは、私と、佐分先生と浦川先生と長谷川さんぐらいと、後からはいつてきた数名ですね。

—— 月謝などはありましたか。

福本 月謝というか会費ですね。初めからずっと裸婦のモデルでしたから、その

モデルさんの費用をみんなで割って。だから先生には月謝は入ってなかったと思います。ただみたいな値段でしたね。綾子先生が休憩時間になると下からお茶とかお菓子とかいろいろものを持って2階に上ってきて。綾子先生は一切アトリエに入っていないですから。本当に裏方にまわって、階段に「はあい」と茶菓を置いたらさっさと降りていかれる。描いてるところを邪魔しませんでしたね。

—— 1回で何時間ぐらい描いたんですか。

福本 モデルさんを使っているので、5分とか10分とか休憩を入れてトータルで2時間。クロッキーとか油絵とかやりました。1回目はクロッキー。3分とか5分とかっていう感じで。後の2、3、4回は油絵で固定ポーズ。木炭でやりたい人はやる。描いた油絵は途中で毎回引きあげて、火曜日になると持ってきました。

—— 同じモデルを使っていたんですか。

福本 ええ、モデルさんは続くときはずっとその方でした。一番長く続いたのは林さんというモデルさんで、雰囲気があってみんながとても気に入ってたんです。その方が来られないときは違うモデルさん。最後の方では林さんが結婚して来られなくなったので、モデルを探すには大変苦労しましたけどね。でも最後まで裸婦のモデルをなんとか確保しながらやってましたね。

—— 「かようぞく」は何人まで、とか決まりはあったんですか。

福本 とにかくお部屋に入るスペースに限りがあるんで、あんまり大勢入れないんですよ。大体誰も勧誘しませんからね。増えたら困るもんだから、知らせまいという思いがみんなあるんで。だから、入りがたっている人を断ったって話も聞いたことないし。私はラッキーだったんだわね。秘密の穴蔵でしたから。

—— 大体いつも同じような人数ですか。

福本 そうです。たまに休む方がいたりしても、普通の部屋ですから早く行かないといい場所取れないですからね。遅く行くと描いている人の隙間からモデルさんを見なきゃいけないから。5、6人でもいいばいでしたからね。イーゼル立てて、モデルさんの目の前で描いてました、かぶりつきで。

—— 受験生で来られる方はいるんですか。

福本 いなかったですね。大体私たちそういうアンテナ張らないから。

—— どなたかがお止めになったときに入れ替わりはあったんですか。

福本 ないです。まあ一人ぐらいいいだろうと見計らって、あの人なら、と言う人を誰かが連れてくるんですね。晴先生はそれを受け入れるだけ。いやとかいいとか何にもおっしゃらないから。阿吽の呼吸でみんなやりましたね。

スケッチ旅行の話—福本氏持参の写真の話

福本 写真を探したんですけど、晴先生がカメラを持っていて私たちを写すので、ほとんど先生が写ってないんですよ。



図1 1976年2月 新潟県妙高 綾子



図2 1975年7月 岐阜県奈良井宿 晴



図3 1974年 三重県塩浜の大クス
左から長谷川、晴、福本



図4 1975年10月
長野県旧大平村 綾子、晴



図5 1971年5月 三重県美杉村(現津市) 太郎生



図6 1971年3月 新潟県赤倉 一番右が綾子

これは1976年、新潟の妙高に行ったときのものです(図1)。いつも旅行に行くときは綾子先生も一緒でした。晴先生はもちろん、綾子先生もいつもスケッチブック持って。このときは3泊4日で行ったんです。このときはなんていうホテルだったか覚えていませんけど、そのホテルから妙高の山が真ん前に見えて、ロビーから山がばあっと見えるところなんです。ひたすらスケッチだけ、私たちはスキーは一切やらないで油絵描いてましたね。

—— 旅行は年に何回くらい行ったんですか。

福本 何回も行きました。先生方が元気だった頃は、ようこんなに行ったと思うくらいほんとによく行きましたね。中津川の別荘にも、年に何回も行きました。綾子先生は旅行に行くとき必ず、お弁当を買っては全部スケッチしてました。

これは私がカメラを持っていたんだわね(図2)。信州の、中村邸といって木曾奈良井宿の漆の塗り櫓間屋、そこで先生が一生懸命スケッチしているところです。

—— 旅行の手配はどなたがされていたんですか。

福本 晴先生がいるんな情報で「ここ行きたいねえ」っておっしゃって、情報通の方がいて段取りする者やら、誰かかれかが段取りする。知らん間に決まるんですね。これは、クスノキを描きに行ったんですよ(図3)。三重県の塩浜ってところに、日帰りでした。ものすごい大きなクスノキなんです。これ多分、晴先生の作品としてあると思いますよ、スケッチか何かで。

これは75年、中津川の先の大平峠(図4)。全部廃村されたところへ行っただけです。綾子先生も一緒に。もう人は住んでなくて。もう40年近く前です。よく出かけましたね、ほんとに。写真見ていて、ああ、私の人生って晴先生と綾子先生とあったなあ、幸せだったなあと思いますね。

これは、1971年、三重県の美杉村の太郎生に1泊2日で行ったんですけど(図5)。スケッチに行くときこんな感じで。

—— 皆さん並んで描いてるんですね。

福本 多分これ先生が撮ってます。先生は写真撮ったらみんなの分焼いてくださるから。知らん間にスケッチに描かれてたりね。全然知らなかったですから。

—— 旅行に行ってスケッチしたものを作品におこすまでの制作している姿を、晴さんは皆さんにお見せしていたんですか。

福本 そういふのは見せないですね。大体クロッキー帳にさっさか描いておられて。

—— そのスケッチを皆さんにお見せすることは。

福本 ないです。ただ、火曜日にアトリエには行くものですから、先生が描きかけてある絵だとかは見えますけどね。ご自身が描いたものを見せたりはしないし、私たちも見せてくれとも言わないし、暗黙のうちに。先生は私たちが描いたのを当然批評してくださるから見ますけど、先生の作品は見たことないです。

—— 「かようぞく」の皆さんとスケッチを見せ合うこともあまりなかったんですか。

福本 ないです。描いている時間はみんな自分のことで一杯ですから。描き終わっ

てから見ることもないし。「かようそく」の展覧会のときに出品してわかるくらいで。自分で選んで持っていきますからね。晴先生から「ああしなさい」「こうしなさい」という指示はなかったです、デッサン以外は。先生はデッサンの悪いところは指摘しますけれど。手直しもしてくださるし。それ以外はほんとに、「ああしなさい」「こうしなさい」と一度も聞いたことがないですね。

これは新潟の赤倉に、3泊4日でした(図6)。1971年です。スキーなんかしないで、絵を描きに。

—— 大雪でもみんな楽しそうですね。

福本 そう。楽しいから先生の行くところ、みんなついて行きたがって。

これは日帰り^{あすけ}で足助に行ったときに(図7)。たまたま先生が二人で写っていた写真があったんで。

—— 「かようそく」のどなたかが車を出されて行くんですか。

福本 はい、みんな車に乗れたんで。車に乗れないと覚王山のお宅に行けませんからね。当時は路上駐車OKだったんで、ご自宅の前にみんな停めてました。停めてもいい時代だったんです。

宮脇家の話

福本 これは1976年、ホディスさんはモデルで来ていただきました(図8)。私たちも一緒に描いたんです。後ろに写っているのは先生の自宅ですね。門の前です。

—— ホディスさんがいらした期間はどのくらいですか。

福本 「かようそく」で英語の教室を持ってる加藤さんて方がいて、その縁でホディスさんが留学してきて。1976年の2ヶ月くらい、5、6回かなあ、先生のお宅にモデルとして来られたんですよ(図9)。たぶん先生は「かようそく」のときだけじゃなくて、個人的にも呼んでると思いますね、期間内に何回か来てもらってね。

これは自宅で、先生がヒナゲシ描いてる(図10)。自宅に沢山ヒナゲシ作っていたので、そのときの写真です。花を描くっていったらヒナゲシばかりでしたね。よく私たちもこの庭に描きに行ったんです。晴先生はヒナゲシのなかで綾子先生をよくモデルにしてらしたし(図11)。

—— ほかに育てていた植物とか花は。

福本 ムラサキハナナ、って花がありますね。紫色のちっちゃい花で、あれも好きでしたね。

—— 綾子さんの作品でもありますね(図12)(図13)。

福本 庭にこのヒナゲシとムラサキハナナがもうずっと生えてましたね。お庭は今の宮脇家の建物を新しく建て替えたときにつぶしちゃったんですけどね。

家は道路に面した角地で、家の一階は応接間と寝室があって。玄関は、狭いですよ、今の家じゃないんでね。玄関の左に扉が一個あって、先生たちの寝室です。寝室は



図7 1980年10月 愛知県足助町(現豊田市)



図8 1976年4月
自宅の前 左から福本、長谷川、ホディス、綾子



図9 《ミス・ホディス》
1979年 当館蔵



図10 1981年 自宅の庭 晴



図11 《ひなげしの庭》
1977年 当館蔵

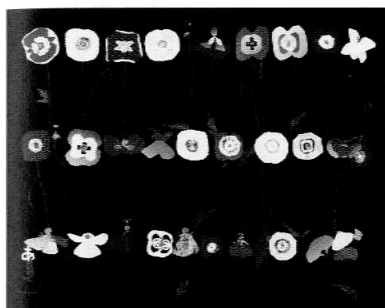


図12 《ひなげし》
1969年 当館蔵

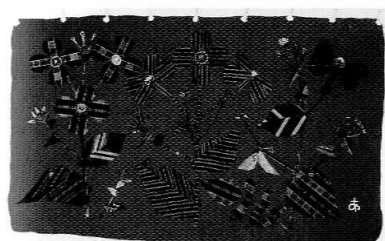


図13 《紫花菜》
1972年 当館蔵



図14 1982年11月 画廊ホルベイン(名古屋)

そんな広くないですからね、ベッド二つ置いたらいっぱい。玄関から奥に入ったらお手洗いと風呂場があって。台所と、先生方の食堂があって、そこは居間と続きでワンフロアになって。ここで綾子先生は仕事したり応接間を兼ねてました。だから下の階は二部屋しかないですね。二階は全部アトリエでしたけどね。

すごく趣きがあるお家でした。門があって、細い人がちょっと入れるくらいの幅しかない道があって。庭はそんなには広くないですけど、先生たちが可愛がってた犬の小屋があって、庭の3分の2くらいにヒナゲシが植えてあって。縁の方には外から中が見えないようにキョウチクトウが植わってました。キョウチクトウが大好きで。それから鳶のある、夏にオレンジ色の花が咲くノウゼンカズラも好きで、一本植わってましたね。それからムラサキハナナがいつもありました。家の裏に入るちょっとした道とか、庭のあちこちに。メインはヒナゲシでしたね。庭は居間からも寝室からも見える、みたいな間取りでしたね。お家はいい感じの雰囲気ありましたよ。

—— ご夫婦でお庭の世話をされていたんですか。

福本 ええ。でもたぶん、庭の世話は綾子先生じゃないですか。綾子先生が「今年は肥料をやりすぎたから葉っぱばかりになって花がさみしい」とかね、おっしゃってたんで。

とにかく本当に、ご夫妻は絵に描いたように、尊敬しあって、言葉遣いも丁寧だしね。夫婦であんな丁寧な言葉を使える夫婦っているんだなあってくらい。綾子先生は明治の女性ですから、仕える、でしゃばらない、それでもってあれだけの仕事をされてるんですからほんとにすごい方ですね。なかなかありませんわね。愚痴聞いたことないしね。まあもちろん私たちに言うわけないしね。でもお互いそんな雰囲気何にもないです。晴先生も綾子先生をすごい尊敬して見ておられたし、綾子先生も当然のごとく仕えてましたね。

一緒に「かようぞく」展にこられたときのいい写真があったんです(図14)。当然だけど必ずお二人で来られるんで。

—— ペアルックみたいですね。

福本 いつも晴先生はおしゃれでしたからね。綾子先生ももちろんおしゃれを絵に描いたような方だからね。二人ともおしゃれでしたよ。本当に素敵なお夫妻で、もうあんなご夫妻は出てこれんなあ、なんて。見たことないようなご夫妻でした。

—— 晴さんはあまり怒らない方なんですか。

福本 怒ったのを見たことないです。すごいユーモアがありました。

—— 「かようぞく」で習いに行ったときは、綾子さんはいつも作品を作ってたんですか。

福本 ええ、応接間で綾子先生いつも仕事してました。作ってる姿しかほとんど見ないです。いつも手を動かしてましたね。家事をして、空いた時間はスケッチとアプリケやりました。描くことが速かったです。観察とかスケッチに対する姿勢は、晴先生から学んだと思いますけど。でも少なくとも私たちの前で晴先生が綾子先生

を教えてるところは見ませんでした。アブリケの布を切るときは一気呵成の勢でしたよ。右手の親指は普通の人の二倍の太さがありましたね。旅行に行くときの電車の中でも手はいつも動いて、布から「柿」を切り抜いたり、お弁当をスケッチしたりしていました。

—— 宮脇さんのお宅は、人の出入りが多かったんですか。

福本 そう思いますよ。人がよく集まったと思います。みんな先生方を慕っていく人ばかりですね。私も先生のお宅で知り合った方がいっぱいいますから。先生を通して知り合った方がね。先生方のファンになってしまってお手伝いに行ってた方もいますからね。お掃除にきたり、買い物にきたりね。先生方を好きで好きでしようがない方もいたんでね。それが日々の日課の、生活の一部になってるというような方もいましたからね。

—— 沢山お孫さんを描いた作品やスケッチがありますね。

福本 長男の桂さんはお仕事の関係で、ご家族で岐阜の高山にいて離れてましたけど、長女の千瑛子さんが名古屋の代官町に住んでいたんですよ。あの方に二人女の子がいますね。そのお孫さんをすごい可愛がってらして。上の子が奈美さんで、下の子が由美さん。

—— 二人姉妹が描かれていると思ったら、奈美さんと由美さんですね。

福本 そうです。モデルに沢山なってるのは奈美さんだと思います。奈美さんが初孫で、この方が絵を習ってたんです。私たちとは一緒に描いてませんけど。この子たちを描いたスケッチは沢山あると思いますよ。

中津川の別荘の話

—— 中津川の別荘には、夏に行かれていたんですか。

福本 四季折々行っていました。誰かかれかと。私も何回も行きましたし。別荘にすごい立派な松を持っていたので。高校で教えていたときの生徒もいますからね、男性で、なかには植木できる人も大工さんもいたんでね。絵を描かなくても、ちょこっと軒を直していくとかね。だからみんな知り合いになっちゃって。

恵那山が真正面に見えるんですよ。その前を中央線の電車が走っていく。木曽川があって、国道があって。落合ダムの近くの高台です。鳥を捕まえて、昔はよかったんでね、それを食べさせていた元料理屋だったんですよ。竹やぶがあって、竹のお料理食べさせてくれるところもあったし。別荘は料理屋さんのあとだから景色もいいし、そこで綾子先生も沢山作品をアブリケしてますね。ここはもうしょっちゅう行きましたね。木造の平屋建てで、台所も土間みたいなところでしたね。お風呂ももちろん五右衛門風呂だしね。先生方はうなぎが好きなんで、中津川の駅の近くのうなぎ屋さんで食事取ったりして。

—— 《竹やぶに立つ像》(図15)では綾子さんが竹やぶで立っていますね。



図15 《竹林に立つ像(綾子古橋)》
1975年 当館蔵



図16 《庭の浴室》
1976年 当館蔵



図17 《孫たちと並ぶ》
1972年



図18 《いで湯の溪》
1967年



図19 《犬をひく自画像》
1976年 当館蔵



図20 《孫と居る庭》
1974年

福本 あれね、中津川の別荘だと思います。竹やぶも沢山あったんでね、中津川には。

—— 《庭の浴室》(図16)も中津川ですか。風呂場は前からあったんですか。

福本 多分あとからつくったんじゃないかと思うんですよ。濡れ縁があって、その外に風呂場がありましたから。お風呂場の建物のなかに五右衛門風呂があったんですよ。料理屋さんだったから、もともと泊まるようにはつくられてなかったんで。外にありましたから庭から見えますわね、当然。庭を見ながらも入れますわね。私たちも何回も入ったんです、薪で焚いて。冬はとても寒かったですけどね。

ものすごい広いところで、庭も何百坪ってありました。ちょっと斜面になってて。料理屋さんだったところですから、素敵な松、あれが正面に見えて。晩年くい虫にやられて松が枯れかかってきたって先生が嘆いておられたから、頻繁に手入れに行っていましたね。ほんとに素敵な松でした。

—— 中津川には晴さんが亡くなる直前まで行かれていたんですか。

福本 先生、臥せってから亡くなるのあつという間でしたからね。だから行きましたね、結構中津川に。スキーにも日帰りで行ってこれるんでね。まず電車で行くことはないですね。誰かかれかが車を出して。私以外でもいろんな方がそりゃあいっぱいいますからね。大概車で行かないと、あそこは歩いては行けんとこですよ。山の上をあがっていかないといけないんでね。

『宮脇晴作品集』¹の話

福本 この絵は左から二人目が孫の奈美さんですね(図17)。隣はお母さんの千瑛子さんだと思いますよ。下にいる男の子二人はお孫さんで、長男の桂さんの子供だと思います。

これはね、東北の方に黒湯、ってところがありますね(図18)。あそこが気に入って先生、何回も行ってるんですよ。多分そこでこんな温泉があって。私は一緒に行ってません。

—— 結構遠出していたんですね。

福本 ええ、頻繁にですね。

—— 普段お二人はお着物でいらっしゃったんですか。洋服の方が多ですか。

福本 晴先生は何かあると紋付袴でしたね。丸栄で、ご夫妻で展覧会をやりましたね²、あの時も紋付袴でいらして。綾子先生は外出のときは大概着物。旅行のときは全部洋服ですよ。でも大事なときはほとんど着物でしたね。ご自分で、パッチワークでつくった着物だとか着てましたね。晴先生は、私たちの前に軽装では出てこないですね。これは、シロって名前だったと思うんですけど、先生、白い大きな犬を飼ってたんですよ(図19)。いつも散歩に行くのが楽しみで。シロが亡くなったときに先生方泣いてましたから。長いこと可愛がってましたね。晩年は犬を引っ張って、連れて散歩するのも大変になってきたと言っていましたね、すごく大きな犬でしたから。これは中津川で、綾子先生が後ろにおられますね、作品のなかに。背景は恵那山ですね。

—— 晴さんはこういう格好を中津川ではしないんですか。

福本 私たちはあまり見ないですね。持ってらしたとは思いますが。普段はこんな藁そうりも履かないしね。まあ私が知らないときに中津川で着ていた衣装かもしれませんね。犬は、一緒に行かれた方が車に乗せていったのか。いろんな方と行っていたのでありえますわね、犬だけ置いていけないんで。だから連れて行ったこともたぶんあると思いますよ。

この絵も中津川の別荘です(図20)。庭から見た風景ですね。シロがいますね。右から松の枝がちょっと出ます。

—— お孫さんたちとも中津川に一緒に行かれたんですか。

福本 お孫さんたちとも行ったと思います、ご家族で。私たちと一緒にいくことはなかったです。なんたってまだお孫さんは十代で若いですからね。

—— これが宮脇さんのご近所にあった、とても大きな木の並木ですね(図21)。

福本 そうです。道路の拡張だったか、もう切られるから、さびしくなるから今のうちにちゃんと描きに行かなきゃ、って先生が描いてましたね。私もよくこの横を通ったんで。ほんとにもったいないなあと思いながらね。

この方は「かようぞく」の加藤さんですね(図22)。衣装が面白いから、ってね。よく外国に行っていて、絵も描いてた方だからちょっと面白い衣装を持ってて。この方が英語をやってて、ホディスさんを連れてきたんですよ。

先生は火曜日夜以外のときに時間見つけて描いていたようですね。私のように、「かようぞく」でも何人かいますよ。描いてもらった作品は、メンバーの皆さん自分で持っていると思いますよ、それぞれが記念にね。

—— これは福本さんを描いているんですね(図23)。

福本 パッチワークの上着はフランス製で、当時は珍しくて。私まだ持ってると思います。先生は私が着ていたこの上着を気に入ったんですね。先生は寡黙でもあるけどユーモアがあるから、モデルになった時も、緊張することなくてリラックスできました。この作品は私が春陽会会員になったときに、先生よろこんでくださって、記念にとくださったんです。

これは長谷川澄江さんで、よく写真に出てますね(図24)。この方も最後まで「かようぞく」にいた方です。

—— 皆さんお召し物が格好いいですね。

福本 こだわりのあるもの着てましたね。

—— この背景の場所は覚王山ですか(図25)。

福本 そうだと思います。散歩されているときにはこんな格好だったんじゃないですか、綾子先生と散歩されるときはね。自宅ではこんな作務衣着ていたと思いますよ。毎日散歩していたんでね、犬と一緒に。いつも綾子先生と二人と犬で。犬が亡くなってからも二人でしたから。晴先生が亡くなって、綾子先生も散歩ができなくなって。出る機会がだんだん少なくなって。一人ではなかなか出づらいですもんね。

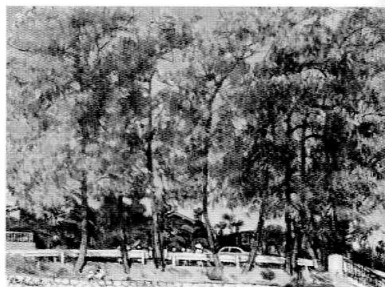


図20 《櫟紅葉》
1977年 当館蔵



図21 《ガテマラ風の装い》
1978年



図22 《パッチワークの女性像》
1978年 当館蔵



図24 《赤い装い》
1980年



図25 《冬の散策》
1980年



図26 《包帯のある自画像》
1981年 当館蔵

そうそう、こんな大きなこぎりは沢山集めてましたね(図26)。2階のアトリエに掛けていましたから、形が面白って。中津川とか信州の方へしょっちゅう買いに行ってたんで。林業の盛んな地域ですから。古道具屋さんで見つたり、いろんなもの買ってました。綾子先生の古布なんかもね、そういうところで探したのも沢山あると思いますよ。別荘でも五右衛門風呂を焚くのに薪が必要でしたし、鉈とか使ってた。これは、猟銃を持つのが長男の桂さん、中央が長女の千瑳子さん、ギターが次男の檀さんだと思います(図27)。先生のお子さんですね。

—— 晴さんの昔の話については何かうかがっていますか。

福本 すごく親孝行、というか親思いでしたね。よくお母さんの話をされてましたから。やっぱり親を大事にしておられた。

—— 13歳のときに母一人子一人みたいになられてますね³。

福本 体も弱かったみたいでね、晴先生。そういう話は自分からはしませんが、すごい親を大事にしてたということは、綾子先生がちちら話されてましたね。

—— 綾子さんとそういう話をするのは、アトリエに絵を習いに行ったときですか。

福本 いやいや、なんとなく。絵を習いに行ってるとき以外でも、時々ですけど伺ってたのでそんなときに。家のなかにお母さんの写真とかありますからね。そんないい話を時々聞きました。めったに話されませんけどね。

『スケッチ画帖 私の風土』⁴の話

福本 先生はいつもスケッチブック持ってデッサンしてましたから。なんたってクロッキーのすごい名人ですから。ちゃちゃっと描いちゃう。

—— 宮脇さんご夫婦は、芝居や歌舞伎はお好きだったんですか。

福本 行ってたと思いますよ。私たちとはもちろん、誘うこともないけど。でも行ってる気配はありましたね。観に行くときスケッチブックとか持って行ってみえましたから、こういうのは完全に芝居を観に行ったときですね(図28)。

この方は浦川先生です(図29)。すごくいい先生です。あの当時は一宮高校の有名な先生でしたね。

—— これが佐分妙さん(図30)。

福本 そうです、一宮市でやりました佐分外科の先生ですね。弥生画廊っていう画廊を経営しながら。画廊は妹さんがやって。あの頃一宮では画廊は弥生画廊しかなかったんでね。毎週火曜日、一宮からこの先生が車で運転して、浦川先生乗せて、名古屋まで来てましたわね。

ほんとに井戸端会議しない会で。時間がないし、あっても個人的な話はしなかったんです。こういう人たち、井戸端会議するような感じしないでしょう。

—— 皆さん自分を持ってらっしゃるような方たちですね。

福本 そう。休憩時間でもなんとなくみんな絵を描いてますからね。バックを描いたり。綾子先生が入れてくださったお茶を飲みながらでも、この色どうだね、とか絵の話しかしないし、休憩もそう長い時間じゃないし。余分な話を一切しないグループだったんです。

—— 福本さんはどこから通ったんですか。

福本 名古屋の北区。一宮に移ってから先生のお宅まで通いました。

これは先生が知らん間に描いとったです、私を(図31)。さっきの写真にあったように、三人でクスノキを描きに行ったんですね、長谷川さんと私と先生と、車で。知らん間に先生、クスノキを描かないで私たちを描いとった。あっという間に描いちゃいますからね。ほんとに写真は知らん間に撮ってるし。ぜんぜん気が付かなかったです。でも先生の絵は一緒にスケッチに行っても見せてもらったことないんで。そんな失礼なこと言えませんからね。先生、見てください、なんてことは。

こんな電柱も先生楽しんで描いてましたよ(図32)。とにかくクロッキー得意ですからね。よくこんなの描いてましたね、ペン一本でね。

—— どのくらいの速さで描くんですか。

福本 ものすごい速いです。こんなの5分くらいで。私たちもクロッキーは一本の線で描きなさい、って教わったの。頭の先から足の先まで一本の線で。ちょこちょこ描くんじゃない、最後まで手元を見ないで描きなさい、って。先生は実際手元なんか見てないですからね。

—— 東山動物園にもスケッチに行ってるんですか。

福本 行ってると思います。近いですからね、覚王山のお宅から動物園まで。

—— ご夫婦は車の運転はしなかったんですか。

福本 しません。自転車も乗れないです。見たことないですから。

—— 皆さんで動物園に行かれたことはありますか。

福本 私とはないです。他の方とは行ったかもしれませんが。二人で行かれたか、お孫さんか、他の方か。動物園はすぐ近くですからね。

—— 晴さんはスケッチのほとんどにサインや日付を入れてますけど、「晴」という字でいろいろな落款をしますね(図33)。印はご自分で彫られていたんですか。

福本 桑名に一人、印を作ってくださいの方がいて、その方が気に入って。いくつか作ってもらっていたようですよ。結構楽しんでみたいです。

—— 自分の好きなのをその都度選んで、複数の印を使っていたんですか。

福本 ええ。印章の雰囲気みんな一緒ですもんね。同じ方がつくったものでももんね。

—— 裸婦は皆さんと同じ時間に描いてるんですか。

福本 たぶん、私たちと同じ教室で、週に1回そこでしか描いてなかったね、裸婦は。私たちが油絵やってるときでも、先生はクロッキーやりましたから。

—— そのときはひたすらクロッキーを描いて、皆さんが帰られたあと油彩に向かっていたんでしょうか。



図27 《家族》
1951年 当館蔵

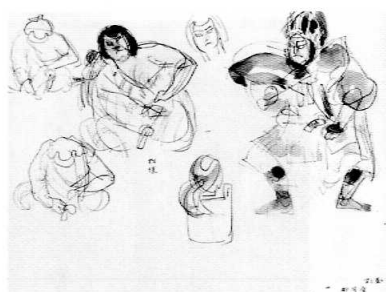


図28 『スケッチ画帖』より
「私は「延若」という役者が好きである。…」(晴の文章より抜粋)



図29 『スケッチ画帖』より
「この方も一宮では名の通った先生。…」(晴の文章より抜粋)



図30 『スケッチ画帖』より
「有名な画家佐分真の入門の女医
さん、…」(晴の文章より抜粋)



図31 『スケッチ画帖』より
「三重県の樟村へ大樟を描き
に行った。…」(晴の文章より抜粋)

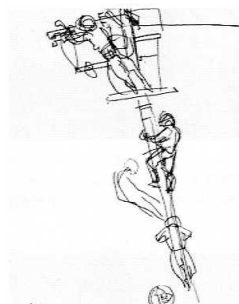


図32 『スケッチ画帖』より
「私は素気ないコンクリートの
電柱が嫌いである。…」
(晴の文章より抜粋)



図33 晴の印章

福本 裸婦ではあんまり油絵って少ないでしょ。

—— はい、《ミス・ホデイス》以外は。あとは綾子さんをモデルに描いた作品があるくらいです。

福本 写真で絵を描くなんてことは先生のなかではとんでもない話で、やってませんでしたし。だから手直すことはなかったんじゃないですかね。週に4回のデッサン教室で描かれたものだと思う。だから私たちが油絵で固定ポーズやってるときに描いたものは、クロッキーとは雰囲気違いますわね。

—— 晴さんが私家本で画集を出したのは、きっかけがあったんでしょうか。

福本 先生は、自分から本を出そうと言う方じゃなかったんで。せいぜい3冊くらいしかないですね。だから、勧められて出したんでしょうね。名古屋の春陽会に教え子で水野豊彦っていたんですよ。その方もとっくの昔に亡くなりましたけど。

—— 『宮脇晴作品集』は編集に水野豊彦さんが入ってますね。

福本 そうです、この方が編集してますね。それから春陽会の渡辺一夫。二人がアトリエに入って作品を選んでいろいろやってました。水野豊彦は亡くなって、渡辺一夫は春陽会にも出品してますけど今はもう90歳近いんで、会合にはほとんど出てみえない方で。その二人が選んでましたね。

—— 本の制作をサポートする人が周りにいたんですね。

福本 最終的には晴先生と三人で決めたと思いますけれど、二人が主体で。頻繁にアトリエにお邪魔してたようですから。

—— 流通している本じゃなくて、自費出版ですね。

福本 どれも限定版で、市販はしてませんね。みんなただであげちゃったんじゃないですか。私も買った覚えはないですけどうちにあります。まあみんな手伝ってはなんか貰ってきたみたいで。お手伝いしてこれ貰ったとか聞いてますから。先生は作品とか、売らないけどただであげてましたね。

福本 久しぶりに写真を見て、なんか知らん間に、ああそうか、私も先生のこの年になったんだ、とか思ってたね。懐かしかったです。

—— お写真を見ると皆さん楽しそうで、いい雰囲気ですね。

福本 本当にいい出会いだね。みんな死んじやいましたけど、仲間も。会えませんが、死んじやったら。だから、思い出だけ財産ですね。

¹1982年、私家本。

²「宮脇晴・綾子二人展」(丸米百貨店・名古屋、1979年9月8-13日)

³晴は宮脇家の第8子四男だったが、13歳になるまでに兄弟は他家に嫁していた次女まさ子を除いて皆死去、父正臣も9歳のときに死去している。

⁴1976年、私家本。

このたび、福本まさ子氏には長時間のインタビュー、加えて電話による補足説明をいただくなど多大なるご厚情を賜りました。心よりお礼申し上げます。